

## 道綽教學における行論の一考察

山 田 行 雄

中國淨土教、就中、純正淨土教の原理を基礎づけた曇鸞と、古今楷定の大業を行い淨土教の實踐法を確立した善導との中間に位する道綽の教字を、その著『安樂集』における行論を考察することに於いて教學史的、或は教理史的に意義づけんとする。

安樂集に示す行業は、諸行・觀念・念佛と、また念・觀を合糅する處も在るが、大別すれば諸行・觀念・稱名の三種を語ると見ることが出来る。安樂集が此の三種の行業を説示するのは、安樂集所釋の經が、觀無量壽經であることに起因すると考えられるが、道綽は觀念と稱名とを淨土教の念佛思想として全く同一視し、これを合糅して觀佛三昧と云い念佛三昧と示したのである。道綽がかく念・觀を合糅し、以つて一念佛とした思想的背景は道綽をして歸淨せしめた曇鸞の行論にあり、更に、大經の本願文を取意し「稱我名字」と稱名念佛を以つて、淨土教に於ける行の本質とせんとしたるが如きも、道綽の時代的意識たる末法思想と相まつて曇鸞教學における行論の必然的展開であると思考されるのである。

曇鸞教學に於ける往生法は、論註の三願的證の引意で知られる如く、本願の三心十念であつて、特に曇鸞は、その十念々佛を重視している。曇鸞の十念釋に就ては、私は曇鸞の示す十念とは、どこまでも行を離さざる憶念であつて、單なる思念、單なる觀念、單なる

稱名でも無く、阿彌陀佛の總別相を觀想する根底、阿彌陀佛の名號を稱する根底に在つて、常に阿彌陀佛を憶念する心が他想なく相續して行く全體——換言すれば、阿彌陀佛を觀想し、阿彌陀佛の名號を稱するの行を離さず、しかもその行の根底的基盤としての無他想なる思念の相續するを十念の内容としたのであると考えるのである。故に十念、即ち行を離さざるの憶念は、觀念にも稱名にも通ずるものであつて、佛體に對しては觀となり、名號に望めては稱名ともなり得るものである。このような觀佛と稱名とは、淨土教の念佛思想として全く同一視されていたものであり、道綽が安樂集に於いて念佛三昧と云い觀佛三昧と云つたのは、蓋し當然であると云はねばならぬ。安樂集に於いて此の曇鸞の十念釋を承けた箇處は、第二大門中第三廣施問答の「但憶念阿彌陀佛、若總相若別相、隨緣觀、逕於十念無他念間雜、是名十念」（眞全一、四〇一頁）とあるのがそれである。此の文を見ると、道綽は十念を觀の一邊のみに取りきるかの如くであるが、然し次に「念阿彌陀佛時、亦如彼人念渡、念念相次無餘心想間雜、中略或念佛本願、稱名亦爾」と稱名をも共に擧げるのである。次に安樂集に於いて十念を出す處は、廣施問答中第五の大經十八願文を引用し、凡夫の臨終稱名が十念を成ずる事を示す略論の文を引用し、次に論註の生即無生に關する文を擧げ、その稱名に依る十念成就の本質的問題の解明にせまり、そこに論註の讚嘆門の釋を出すのである。然し論註は、稱名の如實不如實を決判するのに、不如實行者に就いて三不信を擧げ順逆展轉の相を示したのに止まるのに對して道綽は、論註の三不信を「迭相攝收」の四文字に攝め、稱名が十念を成ずる絕對的基盤としての淳心・一心・相續心の三心を出すのであつて、この三心に裏づけられ

た稱名こそが破滿の益を得ると云うのである。そこで、この三心こそ論註に云う「憶念阿彌陀佛、心々相續無他想聞雜」に他ならぬが故に、結局それは觀念にも通ずるものでなくてはならぬと考思される。次に安樂集は、龍樹の難易二道を解するに、論註の自力他力を以つてし、他力の證明として「大經云、十方人天欲生我國者莫不皆以阿彌陀如來大願業力爲增上緣也」(眞全一、四〇六)と示すのである。勿論大經にはかゝる文は見えぬ故に、道綽は大經の十八願文を取意し、それを論註の語を以つて表言したのである。而して安樂集は、自力得證を聖道門、佛力他力を淨土門と定め、その中、聖道門は今時難證として二由を挙げ、次に淨土門を挙げて、機を明し時を定め法を定めて「淨土一門可通入路」と云い、その法こそ彌陀法なりとし再度大經の十八願文を取意して「若有衆生縱令一生造惡、臨命終時二十念相續稱我名字、若不生者不取正覺」(眞全一、四一〇頁)と示すのである。今この安樂集における本願取意の文と、本願文とを對比して知り得ることは、道綽は觀經下々品の經説を以つて本願文に對照し、これを合糅せしめたと云う事である。即ち道綽は、本願の十方衆生を一生造惡の機にみたと、しかもその惡機を「臨命終時」と臨終に据え、本願の三心を混じて「十念相續稱我名字」と置き換えているのである。然し、かくの如く大經の本願文と觀經の下々品の經説とを對映させ合用する緣源は、既に論註八番問答の篠下に窺い見ることが出来るのであり、此の意味から明かに論註の展開であると云い得よう。今ここに「十念相續」とあるは、先に挙げた論註の「憶念阿彌陀佛、心々相續無他想聞雜」であつて、その時點に於いて稱名することを「稱我名字」と示されたのである。而して安樂集は、次に觀經に依り機の眞實を

顯し、小經に依り勤誠するのである。かくして安樂集に於ける此等三經取意の文は、相資けて阿彌陀佛の本願が如何なる對象に向つて誓われて居るのか、また稱名念佛の行が如何なる對象に向つてその効果を顯すかを明示したものと窺うべきである。かくの如く安樂集の行論は、曇鸞の行論をそのまゝ相承しつゝ、本願の十方衆生を極惡劣機に取り切つて、その衆生の往生行を稱名念佛一行へと展開發展せしめて來た事は道綽の一大釋功と云うべきであるが、此の三經を以つて念佛往生を説くと見た道綽の思想的背後には、これ又曇鸞が三經の體名號に在りとした經體論をその背骨としていると思されるのである。以上の如く、安樂集に於ける行論は、曇鸞教學に於ける行論の相承であり、それを基盤とする展開に他ならぬ云い得るのである。が然し、その中に於ても道綽自身の獨自性如何と云うに、これに答えるのが安樂集第一大門に示された約時被機論である。即ち道綽は修道の要諦は、時と機と教の三つが適合するか否かに依るとして、第一に正法念經を引用して、時と方便とを注意考慮すべきであると、第二に大集經の五箇の五百年説を引用して、時と機を決すべき事を明かにし、第三に同じく大集經の意に依り四種度生法を精査するのである。その四種度生中の、第四の名號度生を語つて三學無分の惡機は、佛の名號を稱しての往生より他なく、これこそ機教相應の眞實法であると斷定するのである。この點、安樂集の著者道綽は、曇鸞の觀稱雙修の説を承けながらも、更に時機の考察と人間性の實相を顧みることに於いて、本願の稱名念佛を以つて淨土教の實踐法として打ち出さんとした事は、やがて善導への稱名第一主義へと展開される媒介の役割を果したのであり、中國純粹淨土教學史、或は教理史上重大な意義を持つものと結論され得る。